

# 29 ロシア・旧ソ連における 日本研究の特質

小野 沢 永 秀 (日本学術振興会)

## I 日本学及び日本研究のヨーロッパ型パターン

### I-1 考察の方法論

プリンストン大学教授で科学政策を研究しているD・E・ストークスは、通常は全く別の性格や機能をもっていると考えられている基礎研究と応用研究について、それぞれ異なった特質をもっているにせよ、それらが相互に排他的であるという考えは、研究のコミュニティや科学政策の発展に不必要な困難さをもたらしている、と指摘している。そしてそれら2つの概念の相関性について、科学研究の動機という観点から第1図のように図示している。

第1図 科学研究の種類

	応用指向	非応用指向
基礎指向	IV 基礎理解を通しての 目標達成	III 純粋な理解
非基礎指向	II 純粋な目標達成	I

注) 本稿では説明の便宜上、上記4つの象限を示す数字(I-IV)をストークスとは逆の順序にしている。

備考1: ストークスによれば、「基礎的(basic)」という言葉が意味している概念はあるが、この言葉が意味している概念は、少なくともF・ベーコンまで遡ることができる<sup>2)</sup>。「基礎研究」と「純粋研究」とは同義。

研究」とは同義。

備考2: ストークスは、二重二分法によって区分されている4つの象限を次のように説明している。

**第IV象限:** 基礎的な科学の理解を促進することによって、実際的な社会の需要にも立ち向かうことができるような研究。

**第III象限:** 特定の問題、あるいは特定の社会的需要を念頭におくことなく、純粋に理解を求める研究。

**第II象限:** 科学的な重要性は大きくはないが、既存の知識を展開することによって、明確に設定された目標を追求し、あらかじめ定められた目的を達成するための研究。

**第I象限:** 「基礎研究」と「応用研究」とが論理的には異なった概念であって、第II-IV象限によって表現された諸カテゴリーが、基礎研究と応用研究に関する一般的な二分法を超えているものであることを裏付けている研究。「科学の基礎的な理解を進展させるものでもなく、応用目的のための知識を発展させるものでもないこの象限は、経験的には決して空ではない<sup>3)</sup>」

概念的に甚だ興味あるこの第I象限に係わる研究とは、ストークスによれば「スポンサーが、ある社会問題を解決しようとする政府の施策実施を抑制するために援助する研究」といったように、

あまり説得性をもつものではない。「基礎研究」でも「応用研究」でもない第Ⅰ象限とは、研究そのものではなく、研究という行為以前のあるもの、あるいは研究を生み出すために必要な基礎知識や教養といった事柄を示しているのではないであろうか。

ストークスの二重二分法によるこの図は、研究助成機関が研究助成を合目的的に実施するために、現在における主として自然科学や工学の研究あるいは両者の相関関係を念頭におきながら設定されたものである。ここでは日本学や日本研究、及びそれと関連している他の諸学問等にこの図を適応することを試みることにしたい。その場合に留意すべきことは、このような図は、あくまでもある種概念を整理するための道具にすぎず、そのような道具によって目的とする概念整理がうまくできない場合は、説明可能なように道具の構造を変えることが必要であるという点である。

### Ⅰ-2 ストークス図の展開：「デベロップ」の意味の変換

二重二分法によるこの図は、政府等の学術助成機関が科学技術の研究助成を効果的に実施するために設定された、極めて現代的な性格のものである。本稿では、この図を日本学・日本研究の歴史的な形成過程、及びそれらと関連している人文・社会科学の諸学問の形成過程を説明する道具（ツール）として使用することを試みた。そのために先ず、基本的指標として使用されている「基礎研究」と「応用研究」の概念、及びそれらによって構成されているストークスの図が、歴史的な諸事象、少なくともイエズス会宣教師による日本の諸事象の記述やヨーロッパ社会への紹介が始まった16世紀の頃まで遡った時代にも有効であるか否かを検討することが、必要であった。その際の基本的な問題は「基礎指向」と「応用指向」以外に、どのような第三の基本的な指標が存在しているかという点である。

第二次世界大戦後、技術革新と産業・経済成長の発展との関連性が指摘され、各国の科学技術活動を測定し国際比較を可能にするために、経済開発協力機構（OECD）が研究開発（R&D）を基礎研究、応用研究、（試験）開発の3つに分けてそれらの活動を計量化する方法を提唱し、それらの概念が世界的に使用されるようになった。OECDの定義から、一見したところストークス図の第Ⅲ象限（純粋な理解）は基礎研究に、第Ⅳ象限（基礎理解を通じての目標達成）は応用研究に、また第Ⅱ象限（純粋な目標達成）は（試験）開発にそれぞれ類似しているように見える。問題は第Ⅰ象限（非基礎指向／非応用指向）に対応する類型が見当たらないことである。英語の develop の語源はラテン語の接頭語 dis (apart, asunder の意) とラテン語 volvere (to roll の意)・中世ラテン語 fallupa (fiver, straw, ball of corn 等の意) とがミックスして形成された。それに由来するフランス古語 developper や同義の英語 disvelop に「包みを解く」の意味が生じ、その後、「畳まれたり巻かれたりしたものを開けたり伸ばしたりする」(15世紀)、「物語や事柄の意味を明らかにする」「含まれているポテンシャルなものを総てをより十分に明らかにする」(18世紀)等の意味が付加されていった。さらに19世紀における科学・技術の発展に伴い、数学における「展開」、ダーウインの進化論における「発生」、写真技術における「現像」の概念等が使用されるようになった。

意味論の観点からそのような歴史的な展開過程をみると、「デベロップ」とは、未知の、あるいは発展のポテンシャルを内蔵している事象（上記の例における「包みの中身」「物語や事柄の内容」「関数」「生物の器官」）を、その事象のもつ価値や意味を変えずにそれ自体

として、置かれた状況や変化する環境との係わり合いをより明確にするために、時間・空間的なプロセスにおいて自己の本質を表現すること、と解釈することができよう。そのような意味を一般化したのが、事象が「発展する」ことの本来の意味である。例えば一つの文化圏を取り上げた場合、そこにおける事象の表現をその時間・空間におけるその事象の「情報」と考えれば、他の文化圏（他の異空間）におけるその事象の異なった表現とは、元の言語で表現された情報を他の言語で置き換えることであり、それが異なった文化圏間における「デベロップ」のもつ意味である。

このように、デベロップを「事象に内在している価値や意味を、時間的・空間的なプロセスにおいて他の形態で表現すること」として捉えてみる。そして第二次世界大戦後企業の調査研究活動との関係において使用され始めた（試験）「開発」の代わりに、「基礎指向」及び「応用指向」との文脈において事象の表現（情報）の「転換指向」と名付けてみよう。その場合ストークス図は、第2図のように変換することができる。

第2図 科学研究に係わる知識システム(原型パターン)

	応用指向	非応用指向 (基礎・転換指向)
基礎指向	IV 基礎・応用研究	III 基礎的研究
非基礎指向 (応用・転換指向)	II 応用的研究	I 諸事象に関する 情報の転換

備考1:「転換指向」という新しい概念を導入することによって、後述するように、第II、IV象限の特質も、ストークス図のそれとは異なっている。そのため、一般的に使用されている「応用研究」及び「基礎研究」の代わりに、第II象限に係わる研究を「応用的研究」、第III象限に係わる研究を「基礎的研究」、第IV象限に係わる研究を「基礎・応用研究」と名付けた。

備考2:基礎指向、応用指向及び転換指向を歴史的な概念として捉えたこの図は、各時代の特定の国・地域（時間・空間の次元）における科学研究に係わる知識全体を1つのシステムとして、さらにそのような全体を構成する4つの象限をそのサブシステムとして捉えることを目的としている。このことは、科学研究に係わる各サブシステムがそれぞれ独自の内在要因に起因して発展・変化すると同時に、それらの発展・変化が全体としての知識システムを発展・変化させるプロセスを示している<sup>6)</sup>。

備考3:第I象限は、相互に排除し合っている「非応用」及び「非基礎」によって、新たに設定された「転換」指向のみを表現することになる。ここではそれを、上記のように表現した。

デベロップの概念を挿入することによって第2図は、ストークス図（第1図）と比べて次のような新たな特質を付与される。

- 1)「転換指向」が「基礎指向」及び「応用指向」のいずれかと係わっている第II象限（応用的研究）及び第III象限（基礎的研究）は、変化しつつある歴史的な環境と対応してそれぞれの基本指標（「基礎指向」「応用指向」）によって特質づけられる諸研究を展開（「デベロップ」の一般的な意味）する機能が付与されたこと。
- 2) 転換指向を含まない第IV象限（基礎・応用研究）は、それ自体は研究展開（デベロップ）の機能をもたず、従ってこの象限における諸研究の発展は、デベロップを含んでいる他の象限における諸研究の発展を通じてのみ表現されること。

科学研究に係わる知識システムの「原型パターン」(第2図)は、空間(各国・地域)及び時間(歴史)における日本学・日本研究の特質を考察するために設定した1つの仮説である。現実の諸事象を分析するためにこの図を使用する目的は、①他の諸学問との関係において日本学・日本研究一般の特質を考察すること、及び②諸国の日本学・日本研究の特質を比較することである。その際の問題点は、この図を構成している基本的な3つの概念(基礎指向、応用指向、転換指向)の規定の仕方がまだ十分ではなく、現実の複雑多岐にわたる諸事象を圧縮してこの図のいずれかの象限と関係づける場合に、そこに、ある種の恣意的な解釈、あるいは既存の諸概念の十分な吟味を経ない使用等の危険が常に存在している点である。そのような危険性を意識しつつ、以下、欧米先進諸国のパターン、及びロシアにおける日本学・日本研究の特質について、知識システム原型図を展開しながら考察することとした。

## II 日本学・日本研究のヨーロッパ型パターン

### II-1 『東方見聞録』の意味

イタリアの商人マルコ・ポーロ(1254—1324?)の東方旅行は、往路はシルクロードをとり帰路は南海行路を経てなされたものであり、「当時における東西の両世界を交通平面の上で統一し」「中世人の平面的な地上世界はマルコ・ポーロの实地検証によって初めて確信」されたのである。彼が帰国後牢中で口述した旅行記を書き綴った『東方見聞録』は、14世紀中に、中世フランス語訳本、標準フランス語訳本、ヴェネチア方言訳本、ラテン語訳本といったように、種々の言語に翻訳されていった。現存する古写本は、ヨーロッパの五十有余の国に分散し、140種に及んでいた。<sup>7)</sup>

『東方見聞録』は、当時の中央アジア、元朝中国及び南海行路における住民の風俗習慣、現地の産物、市況、物価等を詳細に記述したものであり、訪れる機会がなかった日本については、「ジパングは、東のかた、大陸から1500マイルの太平洋中にある大きな島」であり、「住民は皮膚の色が白く礼節の正しい優雅な偶像教徒」であり、また「この国ではいたるところに黄金がみつかるので、国人は誰でも莫大な黄金を有している」等々と紹介している。<sup>8)</sup>

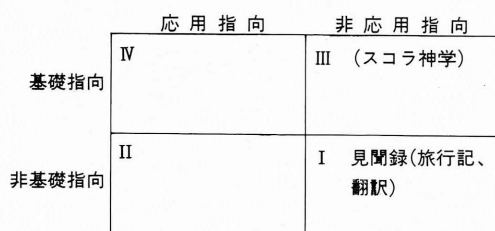
当時の西ヨーロッパの哲学を新しい方向に向けさせた要因として、①大学の創設(パリ大学、オックスフォード大学)、②托鉢修道会(フランチェスコ会、ドミニコ会等)の研究活動、③アリストテレスの思想の発見(「自然学」の翻訳等)、及び④アラビア哲学との接触であった。それらのことが、「13世紀を哲学史上偉大な世紀」にしたのである。<sup>10)</sup>しかしながら当時、科学実験として考えられていたのが占星術や錬金術や魔術であったという点からみても、近代的な研究活動がまだ存在しなかったことは明らかである。ただここで特筆すべきことは、上記③と関係しての外国文献翻訳の意味である。英国のロジャー・ベーコン(1214—1292)は、「知恵の第一の門戸」として言語研究(ヘブライ語、ギリシャ語、アラビア語)をあげ、それは聖書の研究だけではなく他の研究にも有用であるとしている。12世紀には大量のアラビアとギリシャの古典がラテン語に翻訳された。その時代は、「アラビア人とラテン人が宗教と哲学を和解させ古典時代の世界像を完成させようと努力した時期」であり、東



方（ギリシャ、アラビア）からの知識の導入と同時に、マルコ・ポーロの例に見られるように東方（中央・東アジア）への知的関心が活発になった時期でもあった。当時のヨーロッパにおける東方諸国との交流による知的再編成の基盤となったのが、それらの地域との人の往来であり、それによってもたらされた東方諸国の哲学や社会事情等に関する知識の翻訳という行為であった。

マルコ・ポーロの『東方見聞録』は、当時のヨーロッパにとって全く異質の文化である日本の自然や社会事情に関する一般的な紹介であること、同書が当時のヨーロッパの諸国語に翻訳され広く読まれたという二重の意味において「諸事象に関する情報の転換」を意味する第Ⅰ象限内に位置づけられる。従って第2図の第Ⅰ象限は、次のような特質が与えられる。

第3図 科学研究に係わる知的システム(13世紀)



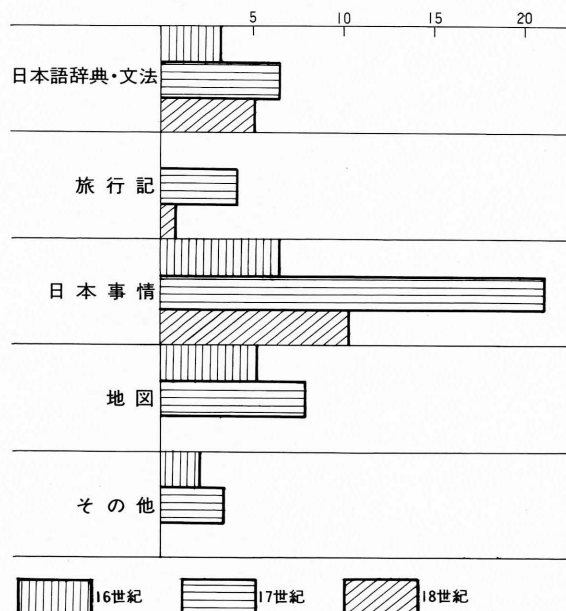
備考：13世紀の科学実験は錬金術、占星術等に支配され、従って当時、近代的な基礎的研究は存在していない。しかしスコラ哲学者であったR・ベーコンの「実験科学」の思想が当時提起されたことを考慮して、第Ⅲ象限は上記の表現とした。

### Ⅱ-2 16世紀—18世紀における日本学の特質

ヨーロッパ人の日本への渡航は、造船・航海術が発展した16世紀以降のことであった。フランシスコ・ザビエル（1506—1552）によって代表されるポルトガル、スペインの宣教師達の布教活動の過程において、日本紹介に関する書物が刊行されていった。

17世紀30年代における徳川幕府の鎖国政策により、西欧との貿易や文化交流は出島のオランダ商館を通じてのみに制限され、ヨーロッパ諸国との交流のチャンネルは極度に制限されていった。そして出島のオランダ商館を通じて来日したオランダ人、ドイツ人等によって、当時の日本の文化的な諸事象に関する観察がなされた。

第4図 日本の諸事象に関する文献数(16—18世紀)



左の図は、16世紀—18世紀における日本語文法・辞書、日本事情の紹介等に関する文献数<sup>12)</sup>を示している。

備考1：「日本語辞典」中には、ポルトガルのイエズス会宣教師J・ロドリゲス（1561—1634）の有名な『日本語文法』（1688年刊480p.）もふくまれている。日本及び中国の古典文学を引用し、また日本の詩歌を解説したこの書は、「以後275年間、ヨーロッパの言語で書かれた日本

の詩歌の最も詳しい紹介書として、この書物を凌駕するものは、他には何もなかった<sup>13)</sup>

**備考 2**：「日本事情」中には、E・ケンペル（1651—1716）の『日本史』が含まれている。同書は、日本の自然（国土、風土、動植物、鉱物）、哲学・歴史上の特質、宗教（神道、仏教）等を総合的に記述している<sup>14)</sup>。それはもはや単なる短期の旅行者の手記ではなく、長期に日本に滞在した外国人が当時のヨーロッパの知識に基づいて日本の社会事情を百科事典的に把握しようとしたものである。

そのような日本の自然・社会事情の紹介、日本語辞典・文法の編纂は、当時のヨーロッパのそれら諸事象との学術的な比較の観点からではなく、あくまでも異国の現象として理解する努力の中でなされたものであった。それを、日本の理解という「純粋な目標達成」（第II象限）に位置づけることが可能であろう。またそのような位置づけによって、応用的研究としての16—18世紀における「日本学」の性格づけがなされるのである。一方、18世紀後半、「経済学という科学を初めて体系化した社会科学の古典」となった英国の経済学者アダム・スミス（1723—1790）の『富国論』（1776）が刊行された。その著作において彼は、諸国民の経済史の一環として日本にも触れ、「ヨーロッパへ銅を輸出した」、「金銀鉱山はないがメキシコまたはペルーよりも富んでいる」、「シナが貿易を営む唯一の国」、「シナにとっては改善の実例」等とのべている<sup>16)</sup>。市民社会の生産分配機構を植民地との関係において理論化しようとしたこの著作は、基礎的研究の例示として第III象限に位置づけることができる。

当時の先進ヨーロッパ諸国をアジア又はオリエントと対比して、古代ギリシャ哲学やキリスト教思想を共有し人的・知的交流が相互に行われていた一つの文化圏と考えた場合、上記のことから、第5図を作成することができる。

この図は、次の2つの特質を示している。

**第5図 科学研究に係わる18世紀における知的システム（18世紀の日本学）**

	応用指向	非応用指向
基礎指向	IV	III 経済学、等
非基礎指向	II 日本事情研究、日本語辞典編纂、翻訳	I 旅行記、翻訳

1) 当時の基礎的研究の生成とともに、そのような知識に基づいて、応用的な研究として日本の諸事象に関し包括的（百科事典的）に記述した著述が刊行されるようになったこと。第III象限と第II象限との間のこのような関連性は、後述する19世紀の近代的な基礎的研究（第III象限）と基礎・応用研究（第IV象限）との

関連性に対比して、この時代における知的システム、ひいては日本学の特質とみることができる。

2) 日本語辞典の編纂及び百科事典的な記述を有する前記の日本学を第II象限に位置づけることにより、この象限は、日本の諸事象研究に係わる辞書等の、いわゆる二次情報の作成を象徴する機能が与えられたこと。

第II象限に位置づけられた研究を18世紀における「日本学」と称すれば、それはある種の応用的研究であったといえよう。

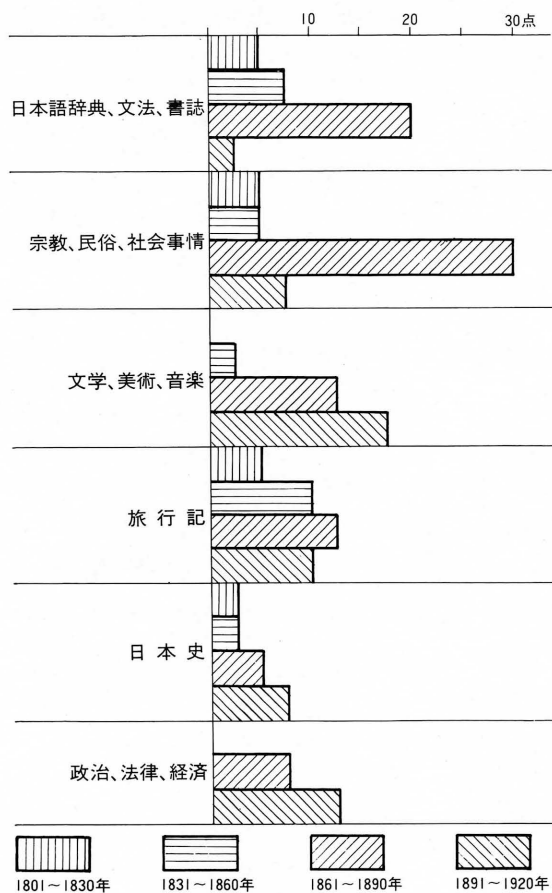
### II—3 19世紀—20世紀初頭における日本学の特質

近代のヨーロッパにおける日本学をも含めた東洋学（オリエンタル・スタディ）の進歩と19世紀以降におけるそのような人文学（ヒューマニティズ）や社会科学の発展について、1917年の社会主義革命前のロシアに生まれ革命後もペテルブルグ大学東洋学部で教育・研究活動を行った東洋学者 V・バルトリド（1869—1930）は、次のように述べている。<sup>17)</sup>

東洋学が発達すればする程、東洋はヨーロッパと同様の科学的方法を適用することによってのみこれを解明することができ、ヨーロッパ史と同様、東洋史においても文化の発展と衰退は主として他の文化・民族に接近するか遠ざかるかによって説明され、文化は依存のこの連鎖においては「東洋と西洋」との間に懸隔がないということが益々明らかになりつつある。その名のもとにおいては、すでにヨーロッパの歴史のみを理解するを以て足りず、「世界史」を理解するためにも、又ヨーロッパ諸民族の史家にのみ依存している限り、その地位が確保されたとは考えられない。「社会学」の創建のためにも、東洋史の研究が必要な所以は、ここにある。

バルトリドが指摘したような当時の歴史学以外に、東洋学の構成に大いに寄与したのは東

第6図 日本関係出版物(19世紀—20世紀初頭)



洋諸地方の言語に関する研究であった。19世紀になると、アッシリア、バビロニアの古代文字の解読に成功してアッシリア学が成立し、シャンポリオンのヒエログラフ解読によってエジプト学が発達し、あるいはサンスクリットの解読等に成功してインド学が成立していった。さらにサンスクリット語、ギリシャ語、ラテン語等が共通の起源を有するとする F・シュレールゲル（1772—1829）の比較文法あるいは比較言語学が誕生したのである。<sup>18)</sup>

19世紀に現れた東洋諸国の歴史と世界史との関連性、比較言語学と各言語の研究との関連性に対して、応用研究と基礎研究に関する OECD の定義を適用することが可能であろう。この場合、それら2つの概念のそれぞれの特徴は、個々のより狭い地域の事象（アジア諸国の個々の歴史、言語等）に関する研究、より具象的な事象の解明に係わる研究（基礎・応用研究）と、それらを広域化し、より一般的な抽象化を目指す研究（基礎的研究）との相違であろう。

この時代における日本に関する研究の主要な主題・時代別の著作物数は第6図（前ページ）<sup>19)</sup>の通りである。

**備考1:**「日本語辞典・文法」中には、P・F・シーボルト（1796—1866）の『日本語要約』（1826, 75p. ラテン語で記述）、イギリス人宣教師 W・H・メドハースト（1796—1857）の『英和和英辞典』（1830、最初の英和和英辞書）、パジェスの『日仏辞典』（1862, 『日葡辞典』1603の仏訳版）等を含んでいる。「書誌」には、L・パジェス『日本書誌』（1859、パリ刊。日本に関する欧文の最初の包括的な書誌）等が含まれている。

**備考2:**「宗教・民族・社会事情」には、英国の駐日総領事として滞在した英国の外交官 R・オールコック（1809—1897）が日本の風俗習慣、文化等を記述した『大君の都』（1863）等が含まれている。

**備考3:**「文学」中には、翻訳物として、柳亭種彦の『浮世絵六枚屏風』（A・フィッツマイヤー訳、1847、ウイーン刊）があり、その後『百人一首』（F・V・テッキンズ訳、1866、ロンドン）、『万葉集』（フィッツマイヤー訳、1849）、『古事記』（チェンバレン訳、1883）、『日本書紀』（アストン訳、1896）等が刊行された。また研究書としては、東大の言語学講師として来日し（1886—90）、上田万年、芳賀矢一等を教えた英国の日本学者 B・H・チェンバレン（1850—1935）の『日本の古典詩』（1880）、外交官として滞在（1864—89）していた W・G・アストン（1841—1911）の『日本文学史』等がある。

**備考4:**「日本史」には、英国の外交官・歴史家である F・O・アダムス（1825—89）の『日本史』（1874）、お雇い外国人として来日した米国の歴史家 W・E・グリフスの『皇国』（1876）等が含まれている。

**備考5:**「政治学」には、明治政府に招待されて来日し日本の民法等を起草したパリ大学教授 G・E・ポアソナード（1825—1910）の『日本帝国の民法』（1882、5巻）等が含まれている。

この時代における日本に関する研究は、通常、20世紀中頃以降の「日本研究」と対比させて、「日本学」と称されている<sup>20)</sup>。それは、ヨーロッパにおいて、ドイツの言語学者ホフマンがオランダのライデン大学最初の日本語教師になったこと（1851）、ウイーン大学での非公式な日本語講座開設（1862）、フランス国立東洋学校の日本語講座開設（1863）等、日本語の教育機関が整備され始められていた時代であった<sup>21)</sup>。

第6図から得られるこの時代の「日本学」の特質は、次の通りである。

1) 明治維新（1868）による諸外国との国交開始と関連して、各主題、特に旅行記、日本の歴史、社会事情等に関する調査研究が一つのピークをなしていること。

2) 19世紀後半から、日本史、政治・法律・経済、文学・美術・音楽（特に日本古典文学の翻訳）に関して専門的な著作が現れ始めたこと。

### 第7図 科学研究に係わる知的システム (19世紀—20世紀初頭の日本学)

	応用指向	非応用指向
基礎指向	IV 東洋学(日本の歴史、文学等の研究を含む)	III 個別科学(歴史学、比較言語学、等)
非基礎指向	II 日本語辞書・辞典の編纂、日本古典文学の翻訳	I 理解の転移(旅行記、等)

それらのことから、19世紀—20世紀初頭における日本に関する研究の特質を、第7図のように表現した。

**備考:** 古典文学の翻訳について、翻訳する行為は専門的な言語の知識や個別科学の知識に基づくとはいえ、翻訳そのものはオリ

ジナルな研究ではないため、第II象限に位置づけた。同様な意味で、非専門的な文献の翻訳は第I象限に位置させるべきである。

この時代における日本学は、18世紀のそれとは異なる次のような特質を帯びるようになった。

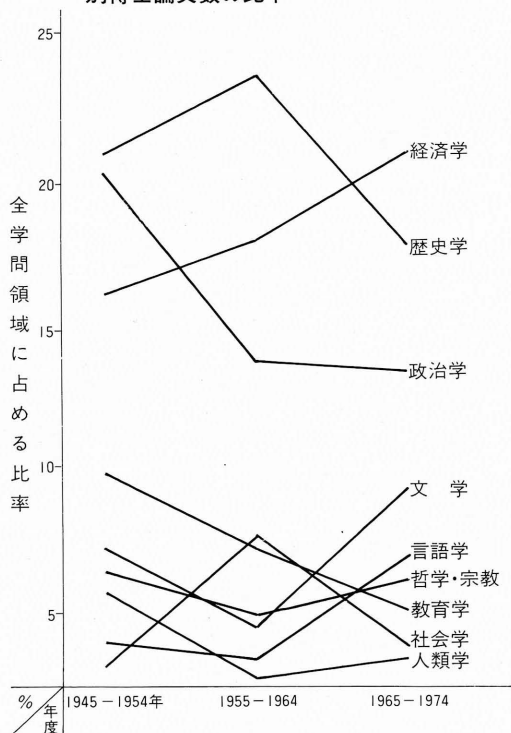
1) 18世紀の日本語辞書の編纂、社会事象等に関する百科辞書的な考察の時代(第II象限)を経て、19世紀のヨーロッパ諸国における基礎的研究(第III象限)の発展に従って、それを基盤として特定の地域の言語、歴史等を対象とする応用的研究としての東洋学(第IV象限)が発展したこと。そのような知的環境のなかで、日本の文化的な諸事象を研究する近代的な「日本学」が発展していったこと。

2) この時代の代表的な日本学者であるP・F・シーボルト(1796—1866)の著作『日本』は、当時のドイツ等の場合と同じように、単に一人だけの研究ではなく、当時の日本の若い蘭学者達との学問的な共同・協業によって研究が行われたこと<sup>22)</sup>。このような共同・協業研究こそ、18世紀の日本学者E・ケンペル(1651—1716)の『日本史』とは基本的に異なった特質であり、また20世紀後半の日本研究の形態の先駆をなすものであるというべきであろう。

#### II-4 20世紀後半における日本研究の特質

第二次世界大戦後における日本に関する研究の特質は、19世紀に確立した東洋学からの分離(あるいは「東洋」全体から個々の「地域」への分割と、諸地域研究の発展)であり、そのような一般的な状況における地域研究としての「日本研究」の生成である<sup>23)</sup>。

第8図 米国の日米関係研究者の主要専門別博士論文数の比率



この小論では、そのようなプロセスを、科学研究に係わる知的システムに内在する進化のプロセスとして考察しようとする。紙面の都合上、そのような知的システムにおける日本研究の特質及びその特有の形態とはどのようなものかについて、若干の点を指摘するに留めておきたい。

#### A. 基礎的研究と基礎・応用研究との係わり合い方の緊密化

第二次大戦後、日本研究の中心は戦前の英国等のヨーロッパ諸国から米国に移行した。その米国において、30年間(1945—1974年)の日本関係研究者の主要専門別博士論文数の比率は、第8図の通りである<sup>24)</sup>。

この図で、全体数の中で最もパーセンテージが多い経済学には、「日本経済を専門とする経済学者数が相対的に低いことと考えると」、「特定の専門地域を持たない経済学者が日本を研究対象として注目するよう

25) になった」とされている。ここでは例示的に、日本研究に関連するいくつかの個別科学を取り上げて、それらと日本研究との関連性の仕方、その進化のプロセスを考察する。歴史学については、前述したように事象のより一般化、抽象化を指向する基礎的研究（世界史、歴史発展の一般法則等）と、基礎的研究の成果を現実の諸事象に適応させ必要な場合にはその一般的な理論を補足し或いは修正する基礎・応用研究（日本史）に区分することが可能であろう。経済学についても、同様に基礎研究としての一般理論と基礎・応用研究としての経済史等に区分することができる。他の個別科学はどうであろうか。

近代的な図書館分類の一つとして米国等で広く使用されているデューイの十進分類表の索引は、それに関して興味あるデータを示している。<sup>26)</sup>（基礎的）研究と関連して応用研究

第1表 図書館分類表（DC）における  
応用研究の進化

刊年（版）	応用研究
1979年版	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 応用倫理学               <ul style="list-style-type: none"> <li>哲学（政治倫理等）</li> <li>宗教（個別の宗教）</li> </ul> </li> <li>・ 応用言語学               <ul style="list-style-type: none"> <li>各国語の語法</li> <li>翻訳・通訳</li> </ul> </li> <li>・ 応用心理学               <ul style="list-style-type: none"> <li>人間関係等</li> </ul> </li> <li>・ 応用社会学               <ul style="list-style-type: none"> <li>社会問題等</li> </ul> </li> </ul>
1971年版	上記のうち「応用社会学」なし。
1913年版	上記の全部の記載なし。

（「applied」）という名辞が付されているものは、第1表の通りである。

備考：これらの言葉がアカデミックコミュニティで使用され始めてからこのような図書館分類表に定着するまでに、かなりの年月を要すると思われる。

この表から、次のことが想定される。

1) これらの「応用」研究（本稿の応用的研究）に対応する「基礎」研究（本稿の基礎的研究）が、それぞれ存在していること。

2) 基礎的研究から基礎・応用研究が派生あるいは分化し、両者の関係は複雑に関係しな

がら進化（デベロップ）していること。

3) 19世紀に確立した基礎・応用研究としての日本学も、当然、そのような相互作用の緊密化のプロセスの中に存在し、あるいはそのプロセスと積極的に係わり合っていること。

## B. 共同プロジェクトの発生

専ら外国人のみによる日本の諸現象の研究が支配的であった18世紀の日本学の時代におい

第2表 日米共同研究プロジェクト数（1971—1980）

専門分野	日本研究	米国研究	日米比較	日米以外を含む	計
経済	2	0	3	2	7
教育・心理	1	0	6	0	7
歴史	4	0	2	1	7
政治	1	0	2	4	7
法律	0	0	2	4	6
社会	0	0	5	0	5
言語	1	0	2	1	4
その他	2	0	1	0	3
計	11	0	23	12	46

ても、偶発的であるにせよシーボルトと日本の蘭学者10人との間において共同作業があったことは、前述した通りである。20世紀後半、日本の諸事象に関する日本人研究者と外国人研究者との間の共同研究が組織的に実施されるようになった。第2表は、特殊法人日本学術振興会と民間団体の米国社会科学硏究協議会（SSRC）との間で10年間



(1971-1980) に実施された日米研究プロジェクト（1プロジェクト当たりの研究参加者は、日米双方とも5-6人程度。研究期間は2-3年間）の専門分野別実施数を示している。<sup>27)</sup>

**備考1:** 日本研究が11件であるのに対して、米国研究が0であるのは、SSRCの選考委員会が日本研究委員会であるのに対し、日本側の委員会は米国研究委員会でない等の事情にもよっている。

**備考2:** 日本研究のプロジェクト数と比べて日米比較研究の数が多いのは、このプログラムが比較研究を奨励していること等を考慮する必要がある。

この表で興味を引くのは、社会諸事象の比較研究に関して、日米比較以外に、それ以外の国々を含んだプロジェクトの数が比較的多いことである。それと関連して指摘すべきことは、その傾向がその後強化され、日米研究や日米比較研究ではなく、社会事象に関する多国間の比較研究にこのプログラムが改組されていったことである。<sup>28)</sup>

それらのことから、次のことが想定される。

i) 基礎・応用研究としての日本研究と他の地域研究（アジア、ヨーロッパ等の諸国・地域）との結びつきが緊密化し、日本と他の諸地域（例えば環太平洋圏、日本海圏等）との間で共通する社会事象に関する研究がされはじめたこと。

ii) 一般的な基礎・応用研究（第IV象限）と基礎的研究（第III象限）との結び付きの強化という文脈において、日本研究と基礎的研究との間にも結び付きの強化が想定されること。それらの傾向を踏まえて、今後の日本研究の方向性の予測に関して第9図を作成してみた。

**第9図 科学研究に係わる知的システム**  
(20世紀後半の日本研究)

	応用指向	非応用指向
基礎指向	IV 日本研究の基礎指向化と応用指向化との相剋	III 基礎的研究の応用指向化
非基礎指向	II 応用的研究の基礎指向化(日本研究の索引化、等)	I 理解の転換(旅行記、マスメディアによる紹介、第)

この図が想定している概念を、この章の結論として列挙しておきたい。

1) 20世紀後半の日本研究は、広義には、19世紀に確立した日本学（第IV象限の基礎・応用研究及び第II象限の応用的研究）における進化のプロセスとして存在している。

2) 19世紀、日本に関する諸事象のダイジェスト的な紹介（辞書、書誌、要覧等の二次情報）の機能が完全に発現した日本に関する応用的研究（第II象限）は、現代のコンピュータ科学・工学の発展に伴い、より組織的、網羅的な二次情報作成の潜在能力をもつようになり、それを遂行するために、より高度な基礎的研究（第IV象限）に関する知識が要求されていること。また日本に関するそのような二次情報の作成・伝達と関連して、日本研究に関する情報処理の中央機関の設立や、各国における学術情報ネットワークとの連携による日本研究情報の効率的なアクセスが期待されること。

3) 13世紀から存在している知識の転換を意味している第I象限も、科学技術の進歩、マスメディアの発達とともに、テレビ等による日本事情の紹介等の形態が発生する。日本に関するそれらの一般的な情報は、研究自体ではないが、個々の専門的な日本研究の成果を補足し、あるいは専門家にとっても日本研究実施のための日本の理解や研究素材として役立つこと。

### Ⅲ ロシア・旧ソ連における日本学の特質

#### Ⅲ-1 誕生・発展期（17-18世紀）

現在のロシアを構成しているスラブ系民族は、7-10世紀にかけて中央ロシアに定住し、その後ビザンツ経由で西欧文化を吸収したばかりでなく、トルコ民族等との接触を通じてアジアの文化を摂取して、ロシア文化を発展させていった。モスクワ公国は、15-16世紀にかけて、トルコ系イスラム諸民族との接触を通じて、スラブ・イスラム圏あるいはスラブ・トルコ圏を形成した。そして16世紀以降カザフ等の中央アジアのイスラム諸民族の土地に侵攻することによって、その領土を拡張していった。<sup>29)</sup>

近代ロシアにおける日本に関する研究は、ヨーロッパで歴史的に発展し19世紀にその最盛期を迎えた東洋学の枠のなかで行われてきた。1991年のソ連邦解体、それ以降における諸独立国家の政治的、経済的、社会的な混乱の中で、旧ソ連の諸国における日本研究を含めての科学研究について今後の方向性を洞察するためには、1917年の革命以前の諸事象や、さらに遡って、中世の時代におけるロシアと東方文化との係わり合い方や文化的交流の状況を念頭に置くことが必要であろう。<sup>30)</sup>

ソ連科学アカデミー東洋学研究所の研究者P・M・シャスチンコ等によれば、ロシアの東洋学は、次の3つの発生源をもっている。<sup>31)</sup>

①第一義的に、外交政策や貿易問題の必要性に対処する実学的な東洋学（その構成部分としてアジア地域における宣教師の活動を含む）。②ロシア国に統合された極東諸民族の伝統的な学校（歴史、宗教、文化等を研究していた教育施設等）の伝統。③フランス、イギリス、ドイツ等西欧の東洋学者（オリエンタリスト）。研究のための彼らのロシアへの招待、彼らの著作のロシア語への翻訳等。

日本へのロシアの接触は、13世紀のマルコ・ポーロの『東方見聞録』が14世紀から15世紀にかけてヨーロッパの諸言語に翻訳された時代や、16-17世紀におけるイエズス会から日本へ派遣された宣教師によって日本紹介や日本語の研究がなされた時代よりも、遙かに後のことである。ロシアにおける日本の諸事象に関する情報は、まず17世紀半ば、上記3つの発生源のうちの③によってもたらされた。即ちオランダ人地図学者G・メルカートルの『世界図』（1670年）の露訳、オランダ人I・イデス（1695年）、S・レメゾフ（1699年）らの地図によってである。

17世紀から18世紀のロシアにおける日本人との接触は、当時の西欧諸国における日本へ派遣した宣教師を通じてではなくその逆に、偶然にロシアの地に漂流した日本人漁夫や商人を通じてなされた。次表は、その時代のロシアにおける日本語の文法や辞書編纂を通じて日本に関する研究が行われていったプロセスを示している。<sup>32)</sup>

18世紀末のロシア（首都のセントペテルブルグ）のアカデミックな状況について、難破しロシアに9年間（1783-1792）滞在した後日本に帰国した伊勢の商人黒屋光太夫が記述した『北槎聞略』は、次のように紹介している。<sup>33)</sup>

ベートル帝の時欧羅巴より有名の師儒を迎え、ムスクワに学校を建、又キラウおよびペ

第3表 17世紀—18世紀のロシアにおける日本語の研究

年	日本語教育・研究・辞書
1701	商人伝兵衛（1697年カムチャツカに漂流）、ピョートル大帝に引見。 モスクワに設立された日本語学校の教師に任命される。
1736	ペテルブルグの科学アカデミー付属日本語学校開設。カムチャツカに漂流（1729）した薩摩の船員2人ソーザとゴンザが教師に任命される（その後日本人の漂流民は日本語教師として次々にこの学校に送り込まれ、ロシア側は彼らから鎖国中の日本の状況を学ぶ）。 ゴンザ、露日辞典を編纂（ロシアにおける最初の辞書。1万2000語を収録）。日本語学校校長ボグダーノフ（ロシア書誌学の創始者）、ゴンザの援助で日本語の簡単な文法書を著す（最初の日本語教科書）。 レザーノフ（1764—1807）、漂流民津田屋兵衛の協力で日本語辞書を編纂。

ートルボルグに学校をたて、諸国の典籍をあつめ、大道に合し人心に益ある書をば悉く国語に翻訳して刊行せしむ、又千七百二十四年（享保九年）に熱羅馬尼亞（ゼルマニア）、雪際亜（スウエシア）、払郎察（フランス）より学士をむかえ百芸窮理の書を編集せしめらる。又百工の作院を設け其業を習はしめんと企ありしが、いまだ其功を卒ざる内翌千七百二十五年（享保十年）に崩ぜられたり。女王カテリナ即位ありて其志を嗣、千七百二十六年（享保十一年）に学校、作院、悉成就す。其学四科に分つ。所謂星学、史書学、窮理学、度数学なり。

この時代における日本の諸事象研究と係わる知的システムの状況は、第10図の通りである。

第10図 日本学に係わる知的システム（18世紀のロシア）

	応用指向	非応用指向
基礎指向	IV	III
非基礎指向	II（ヨーロッパ諸学問の翻訳、日本語辞書の編纂）	I

備考1）第II象現：ヨーロッパ諸学問のロシア語への翻訳に関する第II象限への位置づけは、ヨーロッパの研究システムにおける知的システム（第5図）の特質に基づく。

備考2）第III象限：当時のロシアは、アダム・スミスの『国富論』によれば、「いまだ農奴が存在」「兵士はプロシヤのそれに劣らなかつた」「ピーターI世のおかげで文明化された」等と記述されている。<sup>34)</sup>なおアダム・スミスの著作のロシアにおける翻訳・紹介は、19世紀の当初になされている。<sup>35)</sup>

ロシア人の訪日ではなくロシアに漂流した日本人を媒体として日本語の研究が開始されたことを示すこの図<sup>36)</sup>は、ロシアの日本の諸事象研究の特質の萌芽をすでに含んでいる。即ち①当時鎖国によりヨーロッパ諸国で日本人に接することができなかった人々にとって、漂流民を受け入れた当時のロシアは、日本語の学習に関してはヨーロッパのささやかな窓口の役割を果たしたこと、②その後発展した日本語研究は、極東の日本との間における文献研究を中心とする日本の諸事情の紹介や研究のスタイルであり、ゲルマン系、ロマン語系等の言語とは異なるスラブ系言語としてのロシア語の観点からの、独自の日本語研究のスタイルであること、である。

### III-2 最盛期（19—20世紀10年代）

19世紀の中頃、ロシアツァーリズムの中央アジアへの侵攻は、中央アジアのカフカースにまで及んでくる。日本に対しても、徳川幕府との通商協定締結を求めての数回にわたるミッション派遣、日露和親条約の締結（1855）、明治維新による開国と日本の社会の近代化、日露戦争における両国の武力衝突といった日本の急速な経済的、社会的、文化的な発展の過程において、日本に対するロシア人の関心が急速に高まり、前世紀から引き続いて日本語文法の研究が進展し、より学問的な日本語に関する各種辞書が編纂されていった。

19世紀中頃のロシアにおける外国文献の翻訳・紹介の状況について、いわゆる岩倉欧米ミッションに同行した久米邦武は、セントペテルブルグ図書館の蔵書を次のように紹介している<sup>37)</sup>。

此書庫ハ、世ニ聞ヘタル大庫ニテ、其建築ハ二階造リノ高館ナレトモ、高サハ五層楼ニモ比スヘシ、此内に書籍ヲ蔵スル殆ト百万冊ニ及フ、近年十萬ルーブルニテ仕入レタル、埃及国二千年前ノ書帳アリ、土耳其ノ古書アリ、文字甚タ大ニ字図ハ小指大に及フ、右ヨリ左ニ読ム、此書ハ、彼国ノ古代、国帝ニ手元ニ用イシ本ニテ、帝ノ是ヲ読ムトキ、刺客ヨリ刺殺サレタリ、(中略) 耶蘇教ノ新旧約書ハ、各種ノ国語ニ訳セシ種類ヲ集メテ百二十箱ニ盛ル。日本文字ノ訳ハ、未タ此内ニ欠ケタリ、訳本ナキニヨル。  
(以下略)

なお、久米邦武は、当時のヨーロッパにおけるロシアと他の国々との関係について、次のように述べている<sup>38)</sup>。

欧羅巴ニ於イテ最モ勢力アル国ハ、英、仏、日（ゼルマン）、墺、露の五帝国ヲ推ス。欧州各国ノ強弱、大小相制シテ自主ヲ遂クルヲ得ルハ、此五帝国互イニ国政ノ平均ヲ維持セルカニヨルナリ、其内ニ於イテ最モ雄ナルヲ英仏トス、最モ不開ナルヲ露国トス。西洋人ハ、猶之ヲ土耳其ノ一等地ヲ出セシ国ト看做セルヲ免レス、露人モ亦英仏ノ顯国ニハ心ヲ屈スルヲ免レス、其勉励シテ国歩ヲ進メルモ、其等ノ顯国ト、対等ノ光輝ヲ磨シ出セント欲スルニ過サルノミ、露国ノ欧州ニ於ケル、其光景ハ此ノ如シ、(以下略)。

この時代には、日本を訪問した外交官、宣教師等による多くの「見聞録」が現れた。次表は、ロシア人による主要な日本語研究及び見聞記の書物である<sup>39)</sup>。

第4表 19世紀—20世紀10年代における主要日本語研究及び見聞記

年	文 献
1809—1812	イー・エフ・クルゼンシュテルン（1770—1846）『1803、1804、1805年の世界一周の旅』ペテルブルグ
1816	ベー・エム・ゴロブニン（1776—1831）『艦長ゴロブニンの1811、1812及び1813年の日本人のもとにおける監禁についての手記』ペテルブルグ（井上満訳『日本幽閉記』岩波書店1968）
	ベー・イー・リコルド（1776—1855）『艦長リコルドの1812年、1813年の日本沿岸航海及び日本人との折衝記』ペテルブルグ
1835	『日本の歴史、及び日本の現勢』モスクワ
1855	イー・アー・ゴンチャロフ『1853年初頭と1854年末に日本滞在中のロシア人』ペテルブルグ（井上満訳『日本渡航記』岩波書店1968）

1857	ゴシュケピッチ (1814—75) 『日露辞典』(最初の日露辞典) ペテルブルグ
1860	ストコフ 『簡略露日辞典』ペテルブルグ (注、その後30年間、新しい露日辞典は編纂されず)
1867	ベー・イー・マホウ 『フリーゲート艦ディアナ号1854—1855日本滞在記』
1890	デー・デー・スミルノフ (1855—?) 『日本語研究入門』(注、ロシアにおける最初の日本語文法)
1908	デー・エム・ポズドニューエフ (1865—1942) 『初級日本語文法』ペテルブルグ (注、ポズドニューエフは、同書以外に『日露漢字辞典』(1908東京)等の辞書、日本語文法に関する著作を刊行)
1914	ベー・ヤー・コスティレフ (1848—1918) 『露日会話辞典』(注、コスティレフは、英国の日本学者チェンバレンの『簡略日本語文法』をロシア語に翻訳)

この時代、ロシアにおける東洋学研究は大学や新たに設置された研究所で行われるようになった。

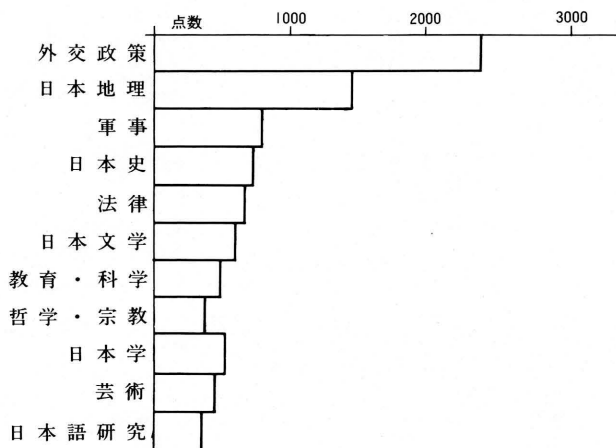
このような日本語教育、日本学研究の組織化の過程において、特にこの時代にはペテルブルグ大学の日本語学部卒業生を中心としてアカデミックな日本学研究が発展していくのである。それら学者の中には、来日して日本の国語学者達と連絡をとりつつ日本語の研究に従事した E・D・ポリバノフ (1891—1938) は『日本の現代標準文語のシンタックス』(1937年モスクワ)等日本語に関する十数種の著作を刊行し、ロシアにおける日本学研究の祖といわれている N・E・コンラッド (1881—1970) 等がある。それらの日本学者達が日本を訪問して日本で研究を行った状況は、第5表の通りである。<sup>40)</sup>

第5表 19世紀後半—20世紀初頭の日本語・言語学における日露の学術交流

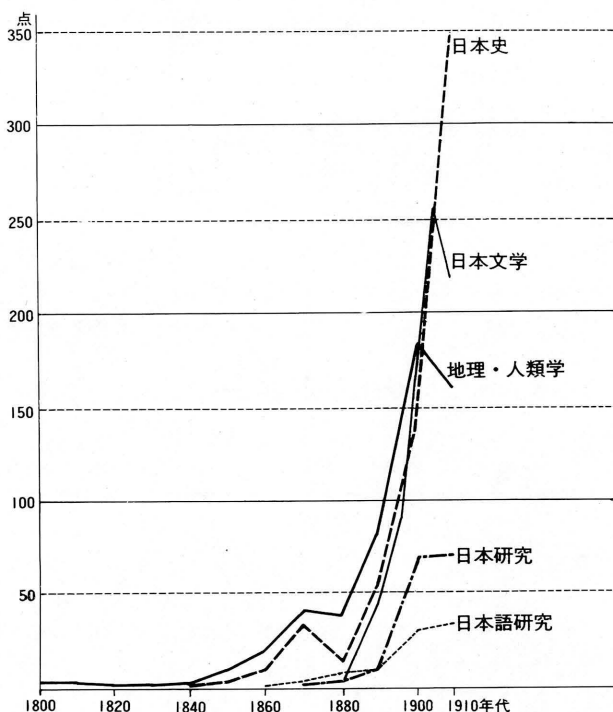
年	来日したロシア人の日本学者
1881	デー・デー・スミルノフ (1855—?) ロシア教会宣教師として来日。日本語文法を研究。
1884—90	ベー・ヤー・コスティレフ (1848—1918) ロシア国の長崎領事として在日。帰国後、ペテルブルグ大学の日本語講師、露日辞典を編纂。
1899—1901	イー・ゲー・スパルビン (1872—1933) 東京外国語学校のロシア語講師。二葉亭四迷等を教える。
1800—1904	八杉貞利、ペテルブルグ大学で言語学を学ぶ。帰国後東京外国語学校ロシア語教授、多くの日本人ロシア語学者を育成。
1906—1910	デー・エム・ポズドニューエフ (1865—1942) 東京のギリシャ正教会において在日ロシア人の子供達への日本語の教授。帰国後モスクワ大学やレニングラード大学の教授。露日漢字辞典を編纂。
1914、5—11	イー・デュー・ポリバノフ、露日協会の派遣で来日。言語学者・佐久間鼎 (1888—1970)、方言学者・東条正雄 (1884—1966)、辞学者・新村出 (1876—1967)、音韻論学者・神保格 (1883—1969) 等と会談。1915年7月—9月、京都、四国を訪問しそれらの地域の方言を研究。
1918—29	イー・エム・コルパチク (1902—1952) 研究生として日本に滞在。帰国後レニングラード大学教授。日本の古代語及び現代語を研究。
1919—29	エヌ・アー・ニェフスキー (1892—1945) 日本に滞在し日本研究に従事。帰国後レニングラード大学教授。琉球方言等に関する著作。

1730年から1919年の間にロシアで刊行された日本に関する雑誌論文等の点数は第11図(次ページ)の通りである。<sup>41)</sup>

第11図 ロシアで刊行された日本に関する雑誌論文等  
(1730—1919)



第12図 ロシアで刊行された日本に関する分野別雑誌・図書  
論文数(1800年代—1910年代)



第6表 1910年代の5年間(1910—1914)における図書の刊行点数(2点以上の分野)

分野	日本人論、日本文化紹介	日本語研究・辞書	文学	政治、経済	産業
点数	12	5	3	2	13

備考1：分類は、原典の区分による。

備考2：「雑誌論文等」は、ほんの僅かな図書類(後掲第6表参照)、及び点数の大部分を占めている1ページから数ページ程度の短い寸評、1冊の図書に収録されている日本関係論文の分出、パンフレット類、ロシア政府・関係機関が制定した法令規則類(特に「日本学」の項)等から成っている。合計数8000点。

備考3：「日本文学」の論文等540点のうち日本語からロシア語への翻訳は207点(38%)、「日本史」の論文等749点のうち近代以降のものは542点(72%)である。

18世紀前半から20世紀10年代までに刊行されたそれらの雑誌論文等のうち、幾つかの分野におけるそれらの年代別分布数は、第12図のとおりである。<sup>42)</sup>

参考までに、20世紀初頭の5年間における図書のみの刊行点数は、第6表のとおりである。<sup>43)</sup>

備考1：分野別分類は筆者が作成。

備考2：5年間の総刊行点数は38点。従って1年間の平均刊行点数は7.6。

19世紀末から20世紀初めにかけての刊行数の急速な増加は、日露修好通商条約の締結(1858)



による両国の国交回復、明治維新（1868）による日本の近代化と国際舞台への登場、日露戦争（1904—05）における両国の衝突、さらには、ロシアにおける文化的な高揚等の影響の複合的な結果であろう。

しかし当時のロシアにおける日本研究の高揚は、ヨーロッパのイギリス、ドイツ等の諸国における日本研究の高揚の時期（1870—90年代）と較べると、10—15年程度の時間的なずれがみられる。当時のロシアがイギリス、ドイツ等における研究を通じて日本を研究する傾向が依然として存在していたこと、従ってそれら諸国と較べて独自の日本研究がまだ十分には行われていなかったことを示している。

この時代における日本研究の特質は、第13図のように表現することができよう。

**第13図 ロシアにおける日本研究の特質**  
(19世紀—20世紀10年代)

	応用指向	非応用指向
基礎指向	IV 日本史、日本文学の研究	III 歴史学、言語学、等
非基礎指向	III 日本語辞書の編纂、日本古典文学の翻訳	I 旅行記

山内昌之は、上記のロシアの東洋学者バルトリドをも含めて次のように述べている。<sup>44)</sup>「1880年代から1930年代にかけて活動したロシアの代表的歴史家たちは、既成のコンセンサスの枠組みにも挑戦しようとした。その博識ぶりは歴史の新解釈とあわせて、ロシア帝国ひいてはソ連の多民族構造の全体的な理解に貢献する

実り豊かな可能性を示した。しかしその蓄は開花しなかった。1920年代から30年代にかけてのスターリン政治体制の確立が歴史学の発展をどれほど阻害したかは、ここでは触れるまでもない」

この図は、4つの象限がそれぞれの知的領域内にそれに該当する知識の蓄積をもっている点で、同時代のヨーロッパにおける日本に関する研究の配置（上掲第7図）と同じである。というより上述のロシアの歴史家バルトリドの「東洋と西洋との間には懸隔がない」という思想は、当時のヨーロッパの他の日本研究者よりも遥かに明確に、研究の本質を表現しているのである。それは、広大なロシアの領土でロシア民族とアジア系諸民族、ロシア正教とイスラム教といった異文化間の人々の政治的精神的な相剋を科学的な目で考察しようとした人々と、異国趣味として東洋を研究するヨーロッパ諸国の人々との問題意識の相違であろうか。

### III—3 衰退期（20世紀20—50年代）

この時代は、従来、世界で初めて社会主義国家としてのソ連邦が成立し、他の諸学問と同様に日本学や日本研究も革命前のロシアと較べて著しい進展を見た時代である、と見なされていた。旧ソ連のドキュメントは、あらゆる機会にそのような見解を画一的に宣伝し、さらに不思議なことに、ソ連が崩壊した現在でさえも、日本を含めて世界の多くの人々は、20世紀前半以降の旧ソ連における日本研究が他の国々と較べて量的質的に豊かである、と信じている。果たして、そうであろうか。

1920年代から50年代の旧ソ連における日本研究関係機関の推移は、第7表（次ページ）の通りである。<sup>45)</sup>

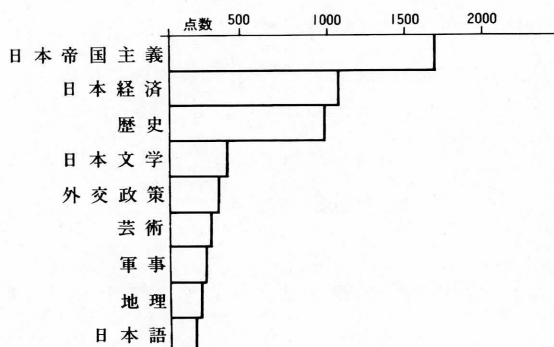
第7表 旧ソ連における日本研究機関

年	機 関
1919	イルクーツク大学に日本研究部門設置。
1920	極東大学日本語科（ウラジオストック、1899年設置）を同大学東洋学部に統合。
1921	アジア博物館（1818年設置）をソ連科学アカデミー東洋学研究所に改組（レニングラード）。日本学・朝鮮学研究室を設置。日本学者のコンラッド、ネフスキーが中心となって日露辞典の編纂、言語学、歴史、文学の共同研究を実施。研究発表の場となったのは、『東洋学研究所紀要』（1932—39、1—7巻）、『東洋学研究所論集』（1935—1946、1—46巻）。
1933	レニングラード哲学・文学・歴史学研究所の設置。
1936	共産主義アカデミーが廃止されソ連科学アカデミーが研究組織の中心となる。アカデミー付属研究所として、経済研究所、歴史学研究所の新設。
1937	レニングラード大学文学部東洋学科の再建。
1938	科学アカデミー国際経済研究所を新設。
1942	ソ連科学アカデミーに太平洋研究所設置。主として現代の諸問題を研究している歴史学者、経済学者等の日本学者がここを拠点として活動。
1949	レニングラード大学東洋学研究所の再建。
1950	ソ連科学アカデミー幹部会において東洋学研究所の立ち遅れが指摘され、総合的な東洋学研究センターの設置を決議。それに基づき、レニングラードの科学アカデミー東洋学研究所をモスクワに移転し、太平洋研究所を合併（文献関係はレニングラード部に残し、主として日本を含む東洋古代・中世の文化、歴史、言語の文献研究を実施）。
1956	ソ連科学アカデミー世界経済・国際経済研究所設置（モスクワ）。

このようにして、自然科学、工学等の分野と同様に日本研究を含めての東洋学研究は、人文科学や社会科学の分野における研究としてソ連科学アカデミーの傘下に組み入れられていた。その場合の東洋学とは、次の特質をもつものとされていた。<sup>46)</sup>

東洋学とは、東洋の歴史、経済、言語、文学、人種、哲学、物質的精神的な遺産を研究する学問であり、地域的には、エジプト学、アッシリア学、アラブ学、シナ学、蒙古学、インド学及び日本学が含まれている。（中略）この時期におけるソ連の東洋学の最も基本的な特質は、マルクス主義東洋学の成功裡の発展である。マルクス主義の潮流がソ連で支配的になり、資本主義諸国におけるマルクス主義者達の研究も東洋学の発展に貢献した。東洋学の発展にとって、ますます増大しつつある意義をもつようになったの

第14図 日本研究に関する論文等の主要分野別刊行点数  
(1920—1958)



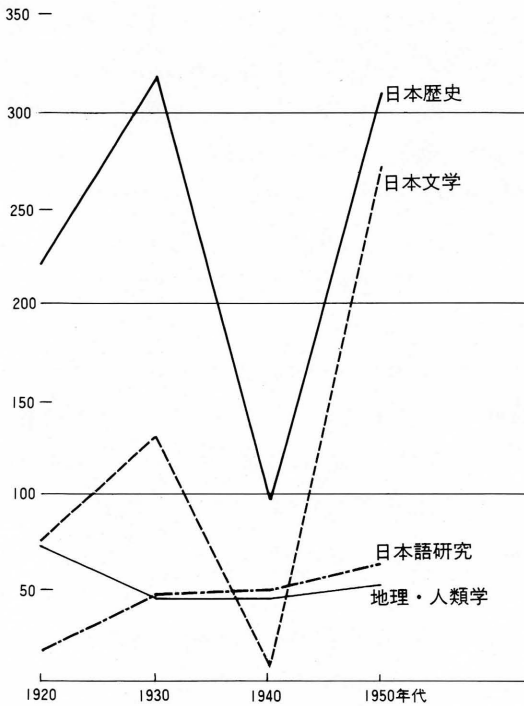
が、（特に第二次世界大戦後における）東洋諸国自体の研究者達の研究である。

1920年から1950年代の間に旧ソ連で刊行された日本研究に関する論文等の数は、等14図の通りである。<sup>47)</sup>

備考1：分野の分類は原典のそれによる。

備考2：総刊行点数は6429点。

第15図 旧ソ連における日本研究(いくつかの分野における論文等の10年間別刊行点数)(1920—1958)



第8表 研究論文数及び翻訳作品数(1920—50年代)

年代	1920—	1930—	1940—	1950—
研究論文	23	51	12	40
翻訳	64	86	0	251
計	87	137	12	291

『痴人の愛』(1929)等がある。

1920年代末になると、ロシア共産党決定等の形による思想や出版の統制が強化され、後にスターリニズムと呼ばれる恐怖政治が開始されていった。1920年代には中央アジアの地域に、ソ連国家の一部としてウズベク、タジク、トルクメン、キルギス及びカザフの6民族共和国が形成されたが、ソ連共産党・ソ連政府は、伝統的な支配構造を支えていた氏族や部族の制度を強制的に解体し、それらの地域に社会主義体制を確立しようとした。1930年代におけるソ連科学アカデミーの社会科学に関する政策は、1929年から開始された第1次経済5か年計画と関連して、①ソ連邦内に組み入れられてきた諸民族の意識内にある資本主義の残存物の除去、②種々の社会組織や階級の歴史的な発生過程の研究、③資本主義以前の社会的な諸発展の歴史、④資本主義の発達とプロレタリアートの発生、⑤植民地搾取の歴史、及び⑥科学技術史であった。<sup>51)</sup>

日本学に関しても、科学アカデミーが設定した、というよりソ連共産党が設定し文化や社

それらのうち、いくつかの分野における年代別の刊行点数は、第15図の通りである。

この図から、①19世紀90年代から20世紀10年代の期間における日本研究に関するある種の高揚が、1917年の社会主義革命後の停滞(計量的にみれば20世紀当初のレベル程度にまで減少)を経て30年代に再び上昇したこと、②第二次世界大戦(1930年代後半—40年代前半)の停滞後、50年代にそれ以前のどの時代よりも多数の論文等が刊行されたことが分かる。1950年代におけるそのような傾向は、次に述べるように現在に至るまでほぼ同じ形で継続されているのである。

1920—30年代において、日本文学の分野では、第8表に示すように論文数等における日本の古典及び近代の詩歌、小説等の翻訳(その多くは、やはり1—数ページ程度の小品)の割合が急速に増えていった。<sup>49)</sup>

1920年代に翻訳された日本文学の古典としては、『伊勢物語』(1921, 168p.)、『大和物語』(1926, 74p.)、『短歌集』(1926, 34p.)、近代文学では谷崎潤一郎

会生活の面でも至上命令となりつつあったイデオロギーに沿って、K・M・ポポフの『日本経済』（1936年）等が刊行されたのである。

日本語の言語学的研究は、一方では20世紀における歴史言語学から共時言語学への世界的な転換と関連して言語学への基本理論に係わる基礎的研究（第Ⅲ象限）と、他方では日本研究のために日本語の文献を読み日本人と話すための最も基本的な道具である（第Ⅱ象限）という性格をもっていた。20世紀10年代—20年代においてロシアにおける日本語研究を当時の言語学の最先端のレベルにまでレベル・アップさせたポリパノフ（前掲）の研究は、長い間言及されなかった。彼の死後、日本語は社会言語学的概念形成の基盤としては用いられず、「権威的な学者達の概念が日本語研究にも適用」<sup>52)</sup>されていった。1930年代後半の数年間、ソ連における日本学派の創始者と言われているコンラッド（前掲）を始めとして多くの日本学研究者が事実無根の弾圧を受けて研究活動を中断させられたのである。他方、実用的な目的のための日本語の研究は、1930年代に『日露軍事辞典』（1935）、『現代日本漢字辞典』（1935）、『露日・日露軍事辞典』（1937）の編纂となって現れた。その後、そのような日本語辞書の編纂は、その後も日本文法等の研究とともに継続され、1940年代後半以降、日本語学者によって一連の日本語辞書が刊行されていった。米国ワシントン大学の日本学者R・A・ミラーによれば、日本語の研究については米国とソ連の2か国が進んでいる状態にまで達する<sup>54)</sup>のである。

1980年代におけるペレストロイカの時代を経て、特に1991年のソ連解体後、旧ソ連におけるロシア共産主義イデオロギーによる科学への干渉、それによる科学研究の歪みや発達の阻害<sup>55)</sup>について部分的に指摘されている。例えば田中英彦は、「今日ではそのいずれもが科学的な検証に耐えられない荒唐無稽なものとして、①獲得形式は遺伝するとして遺伝子の概念そのものを否定したルイセンコ、②19世紀の比較言語学によって象徴される言語の一般性や「言語におけるエトノス性」を否定した言語の階級性、及び③エンゲルスの生命理論をそのまま持ち込んだレペシンスカヤの生命物質論、<sup>56)</sup>の3つをあげている。

階級主義に貫かれた歴史学、経済学、言語学さらには一部の自然科学までもがそうであるとすれば、特に日本研究と係わっている人文・社会科学の特質とは、研究が専らスターリニズムに貫かれたソ連共産主義の社会建設に捧げられる独特の「応用指向」的性格であること、それに抵触しあるいは反する思想は徹底的に排除されていたという点で基礎指向は存在しえなかったのである。従ってこの時代のソ連における日本学は、科学研究に係わる知的シ

第16図 ソ連における日本研究に係わる知的システム  
(1920年代—50年代)

		応用指向	非応用指向
基礎指向		Ⅳ	Ⅲ
非基礎指向		Ⅱ 日本学(日本文法の研究、辞書の編纂、専門書翻訳、書誌の編纂、等)	Ⅰ 翻訳(小説類)

ステム図において、基礎指向に係わる第Ⅲ及び第Ⅳ象限に位置づけることはできない。したがってそれは、第16図のようになるのである。

備考1：第1象限（小説類の翻訳）

1920年代—30年代に翻訳され

た日本の近代小説は次の通りである。<sup>57)</sup>有島武郎『或る女』(1927)、谷崎潤一郎『痴人の愛』(1929)、谷崎精二『芸者エイ子』(1929)、林房雄『絵のない絵本』(1931)、山本有三『女の一生』(1936)、芥川龍之介『羅生門』(1936)。

#### 備考2：第II象限（日本学）

旧ソ連において英語のジャポノロジー及びジャパニーズスタディーに相当するロシア語は、ヤポニストカ及びヤポノベデーニエであるが、両者は、英語におけるように明確に使い分けはされていない。

基礎指向に係わる第III及び第IV象限が欠如しているこの図は、19世紀—20世紀当初及び20世紀後半のヨーロッパ型パターン（第7図及び第9図）よりも、むしろ16—18世紀のそれ（第5図）に似ている。16世紀から現代に到るまでの知的システムにおいて基礎指向に係わる研究発展のプロセスと考えれば、この図は、革命前の知的システム（第13図）と較べても退化している。この図は、その第I象限及び第II象限に置かれたそれら事象の意味付けに関して、我々の前に次のような問題点を提起している。

#### 1) 第I象限における日本の近代小説翻訳の意味づけ

レーニンが亡くなり（1924）、スターリンがソ連共産党の書記長に就任（1929）以降、思想統制が厳しくなり、反宗教法（1929）、出版統制に関する共産党指令（1929）等が制定されドストエフスキー、トルストイなどの小説も出版が禁止されていった。また外国との人的交流も殆ど禁止され、ソ連は「鎖国」の状態になっていった。

1930年代後半における例えば芥川龍之介の『羅生門』は異国趣味の小説、山本有三の『女の一生』はやはり異国における人道主義的な小説であり、現実のイデオロギー闘争とは無関係であり従ってソ連の社会には何の害ももたらさない極東の「小市民」的な思想として、それらの小説の翻訳が許可されたのであろうか。知的システムにとってより重要な問題は、日本との人的交流が閉ざされ、直接に日本の諸事象を見聞することができない状況における、そのような翻訳のもつ意味である。虚構としての小説は、或る意味では事象の現象的な記述に過ぎない「見聞録」よりも遥かに深く、日本人の生活や思想を知ることができる。社会的に閉ざされ、政治的思想的な抑圧が強化されつつあったソ連の読者にとって、近代日本のそれらの小説は、どのような意味をもっていたのであろうか。

#### 2) 第II象限における日本語辞書編纂の意味

この時代における多くの日本語辞書の編纂は、一方では軍事用といえる実利目的（第III象限）のためのものと、他方では19世紀末から20世紀にかけて発展しつつあった基礎・応用研究（第III象限）としての日本語の言語学的研究が抑圧され、そのエネルギーが辞書の編纂にむけられたものの両者が存在していると考えられることも可能であろう。

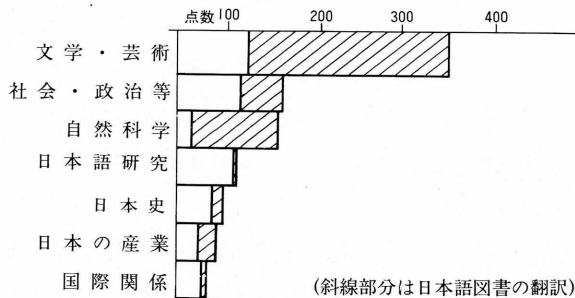
### III—4 1960年代—80年代

1953年のスターリンの死後、検閲制度は残されていたが、作家の執筆活動に関する規制等は次第に緩和されていったが、ペレストロイカが開始される80年代の中頃までは、ソ連のイデオロギーや社会機構は、その前の時代からの延長線上にあるにすぎない。しかしながらこの時代、次の時代の前兆となるような事柄が、現れ始めていた。

日本との関係は日ソ国交回復共同宣言（1956）によって外交関係が回復し、研究者の交流も両国政府間での協定（1973年）に基づいて開始され、人文・社会科学及び自然科学の全分野を対象として毎年10人程度の研究者が相互に相手国を訪問している。人文・社会科学の分野では、1975—1990年の間に37人のソ連の日本研究者が来日した。それらのうち2人を除いてはロシア共和国の主としてソ連科学アカデミー所管研究所の研究者達であり、その内訳は、世界経済研究所（15人）、東洋学研究所（6人）、極東科学センター（5人）、アメリカ・カナダ研究所、国家・法研究所、中央数学研究所（統計学）が各2人等である。そのような両国政府間の研究者交流以外に、国際交流基金等のチャンネルによるソ連研究者の招致も少数にせよ次第に増え、また日ソ歴史セミナー等の合同会合も開催された。

1961年から1985年までの25年間に旧ソ連で刊行された日本研究関係の図書数は、第17図の通りである。<sup>59)</sup>

第17図 日本関係図書点数(1961—1985)



第9表は、1987年の時点での旧ソ連における日本に関する研究とヨーロッパ先進諸国に関する研究の状況を比較した数字である。<sup>61)</sup>

この数字は、日本と旧ソ連との政治的、経済的及び文化的関係が、ヨーロッパ諸国と較べて甚だ少ない現状をそのまま反映しているといえよう。

備考1：総点数は865点。うち翻訳書は433点。

備考2：「自然科学」部門（刊行された149点のうち92%に相当する129点が翻訳書）は、本来は日本研究の直接の対象分野ではない。それとは異なった

第9表 旧ソ連の諸外国に関する文献数(1987)

国名	日本	米国	英国	独	仏
人文科学	5	26	43	62	32
社会科学	11	111	16	70	42
計	16	137	59	132	74

意味で、日本文学の翻訳書（「日本文学」341点中66%に相当）も、本来は研究自体ではないので第II象限に位置づけた。

備考3：「文学・芸術」の翻訳総点数のうち、ロシア語（ロシア共和国で使用）以外の他のスラブ系言語（他の諸共和国で使用。アゼルバイジャン語、アルメニア語、エストニア語、ウクライナ語、ウズベック語、カザフ語、キルギス語、グルジア語、タジック語、モルドビア語、ラトビア語、リトアニア語）の総点数は、106点である。

日本古典文学の翻訳についてみると、『出雲国風土記』（1966）、『播磨国風土記』（1966）、『万葉集』（第1—2巻、1971）、『枕草紙』（1975）、『伊勢物語』（1979）、『平家物語』（1979）、『大和物語』（1982）等が刊行された。また日本語の辞書は、通常の露日・日露辞典が次第に完備されると同時に、特に1980年代における日本の科学技術の進歩に伴い、日露・露日システム工学辞典（1980）、日露電子工学辞典（1981）、日・英・露物理学辞典（1982）、和露科学技術辞典（1984）等が刊行されていった。<sup>60)</sup>



1980年代後半におけるソ連の日本研究の計量的な状況は、それまでの状況とほぼ同じであるが、日本の科学技術関係書の翻訳数が増える傾向が続いていった。

#### IV ロシア、CIS 構成国における今後の日本研究の行方

1991年のソ連邦の崩壊によって、それを構成していた16の共和国はそれぞれ独立して、その大部分はゆるやかな結び付きの独立国家共同体を組織して現在に至っている。旧ソ連における日本研究は、第二次世界大戦以前はロシア共和国のレニングラード（現在のセントペテルブルグ）、戦後も同共和国のモスクワを中心として発達してきた。従って旧ソ連の諸共和国への解体は、一見したところ、日本研究自体にはあまり影響がないように見える。しかしながら観念や思想の面において、17—18世紀のロシアツァーリズムの時代と比べても比較にならない程強圧的、徹底的な統制を行い、特に構成諸民族を圧迫してきたソ連共産党及びソ連国家の70年以上にわたる支配が残している社会的、精神的な傷痕は、一朝一夕にして癒されるほど簡単なものではあるまい。

旧ソ連時代の日本学についても、専ら応用的研究（第II象限）にとどまらざるを得なかったことは、既述した通りである。ここではその文脈の延長線上に立って、幾つかの問題点を指摘しておきたい。

##### 1) 地域研究という観念（基礎・応用研究）

ロシアにおける東洋学は、18世紀中頃から19世紀前半にかけて形成された。ペテルブルグ、モスクワ及びカザフに設置された研究所を中心として、外交官、歴史家、言語学者、文献学者等が中近東のトルコ、イラン等に関する調査に当たったが、当時の研究は、当該対象地域の言語研究を中心とした、専門的にはいまだ「未分化」の状態であった。<sup>62)</sup> 19世紀後半以降におけるロシアの東洋学進歩の結果、特にチュルク（トルコ人、アゼルバイジャン人、カザフ人等）の研究、外コーカサスの研究についてはヨーロッパ諸国の東洋学者よりも優れた研究成果をあげたとされている。それらの民族を構成共和国にとり入れたソ連の東洋学とは、ソ連内部の諸民族に関する研究を排除して、研究の対象をもっぱら国外の周辺諸国の国々に向けていった。そして国内では、東洋学者も含めた人文・社会科学の研究者達は、専ら「ソ連邦内に組み入れられた諸民族の意識内にある資本主義の残存物の除去」（前掲）のために動員されたのである。

旧ソ連には、20世紀中頃から日本研究者の関心の対象となり始めた「地域研究」に相当することば、従って観念は存在せず、<sup>64)</sup> 従って「日本学」と「日本研究」とを区別することばは存在せず、それらは、東洋学の枠のなかで、未分化のままであった。その結果として現象的に表れたのが、既述の通り、応用的研究（第II象限）としての日本学の発展であり、その基礎・応用研究としての理論化（第IV象限）ではなかったのである。問題は「地域研究」や「日本研究」といったことばが存在しないということではなく、それらのことばによって象徴される観念が存在していないこと、さらには、そのような観念を生み出す思想や哲学（基礎的研究としての第III象限）が欠如した点である。そのような基本的な思想や哲学を再構築する際の一つの柱が、スターリニズムによって科学的にも歪められ、また現実の社会におい

でも過去の政治的な遺産として多くの問題点を提起し続けている、諸民族の文化に対する新たな評価や、それに伴う関連諸学科の再構築の問題である。もっともそれは、ロシアの場合だけでなく他の国々の研究者にとっても、今後の問題として、日本研究をも含めた基礎・応用研究である地域研究と、それを支える基礎的理論をどのように結び合わせどのような理論を構築していくかという問題と共通しているのではあるが……。

## 2) 日本学の発展 (第II象限)

従来、旧ソ連の日本学が世界的に優れていたと言われていたのは、日本の古典文学の翻訳や、日本語辞書編纂等の分野であった。従来それらの研究を行っていたのは、日本の経済、社会等に関する研究をも含めて、主としてソ連科学アカデミーの諸研究所であった。同アカデミー (現ロシア科学アカデミー) 付属東洋学研究所は、多数の日本研究プロジェクトに係わってきた研究所の一つである。<sup>65)</sup> かつて科学研究の文字通り中心機関であった巨大な組織のアカデミーは、現在のロシアの政治的、思想的な混乱、計画経済から自由経済への移行の過程における経済的な危機のなかで、機構上の改革が進行しつつある。ある識者の意見によると、旧ソ連科学アカデミー自身の明確な改革案もないままに、多くの研究所のうち存続し得るものはほんの少しだけであり、他の研究所は廃止、大学との統合、技術革新型企業への解体等が予測されるという。<sup>66)</sup> 応用的研究を指向する日本学は、今後、ロシアと日本との間の政治的、経済的な諸問題の動向に影響されつつ、その研究活動を続けていくものと思われる。

しかし今後の日本学 (第II象限) に理念として求められるのは、既述した科学研究に係わる知的システムモデル (第9図) における、日本研究に係わる諸情報の集中管理化、コンピュータ化といった事柄であろう。それは、日本学研究機関や大学日本学科の諸情報をコンピュータネットワークで結び付ける、いわゆる日本学に関するデータベースの作成である。コンピュータ科学・工学が日本や欧米と比べてまだ進んでいないロシア等の国にとって、その実現は、大分先のことになるであろう。

## 3) 日本との一般的な知的交流 (第I象限)

旧ソ連の諸共和国では、従来、日本学に従事する研究者は殆ど存在していなかった。しかしながら前述したように (第16図の備考3) それらの国々の言語で過去に数点から数十点翻訳された日本の小説類は、日本人の現代の思想、文化等を伝える「見聞録」の役割を果たすであろうと思われる。さらにマス・メディアが発達している現在、テレビ等を通じて、あるいは直接に日本を訪問して、日本に関する知見を得る機会も多くなることが期待される。

マルコ・ポーロの『東方見聞録』がその後におけるヨーロッパ諸国の日本学の前兆となったように、ロシアを含めてのそれらの国々の多くの人々の日本見聞録やそれらの知識の集積は、13世紀における程の長い年月を要せずに、それらの国々の日本研究の発展に役立つのではないかと思われる。

## 参考・引用文献

- 1) Stokes, Donald E., Perception of the Nature of Basic and Applied Science in the United States (Gersthenfeld, A. ed. Science Policy Perspective. Academic Press, 1982. p. 1—17)
- 2) ストークスは、その小論では“basic”について、それ以上言及はしていない。学問分類の祖

といわれているアリストテレスは、学問を、①理論的・思弁的学問（第1哲学：神学を含む形而上学、数学、自然学）、②実践的学問（政治学、経済学、倫理学）、③製作的学術（医学、体育学、文法学、影像学、音楽、論理学、修辞学、詩学）に分類している。その①理論的・思弁的学問はストークスの図の第II象限（純粋な理解）と、②実践的学問は第IV象限（基礎的理解を通じての目標達成）と、また③製作的学術は第III象限（目標達成）と、一見したところそれぞれ類似している。しかし両者の基本的な相違は、アリストテレスが上記①に神学を含む形而上学を位置させたことである。13世紀の英国の修道士ロジャー・ベーコン（1214—1292）は、その著作『大著作』において、学問の「知恵の第一の門戸」として言語研究を、「第二の門戸」「諸学問の入口及び鍵」として数学をあげている（高橋憲一訳、朝日出版社、1980、p. 88）。彼の場合も、「他の諸学を支配する唯一の学は神学」であり、経験科学に占星術や錬金術や魔術を含めていた点で、中世的な特質を示している。従って近代的な意味において基礎研究の価値を意味づけたのは、「理論、観察と実験、そして実際の応用の3つがほとんど完全にばらばらに分かれ」、「しかし実験は主として錬金術者や香具師のような人が行って」いた当時の状況（H・バターフィールド他著『近代科学の歩み』菅井準一訳 岩波新書 p. 45）に対して、「事物の不変的認識」としての「第一哲学」の概念を提唱した16世紀のフランシス・ベーコン（1561—1626）であった（『学問の進歩』服部英太郎等訳 岩波文庫）。

3) 上記1) p. 5

4) それらの語の定義は、OECD のドキュメント (Science and Technology Indicators, 1984, Annex 2 Glossary pp. 365—377) によれば次の通りである。

・「基礎研究」(basic research)：特定の応用目的なしに、主として諸現象及び観測しうる諸事実を形成している基盤の新知見を得るための、実験的・理論的な作業

・「応用研究」(applied research)：主として特定の実用的な領域・目的に向けられた新知見を得るためになされるオリジナルな調査研究

・「実験開発」(experimental development)：既存の知識や実際の経験を使用して、新しい材料・製品・装置の製作、新しいプロセス・システム・サービスの設定、及びすでに作成・設定されたそれらのものの改良に向けられているシステムティックな作業。その作業が基本的には試験的性格のものであるので、大量生産の原型（プロトタイプ）やパイロットプラントも含んでいる。

5) E. Klein, ed. A Comprehensive Etymological Dictionary of English Language, London. Elsevier Pub. 1966.

6) この4つの象限（サブシステム）の概念は、物理学者・哲学者の A・N・ホワイトヘッド（1861—1947）の「永遠的客体」の概念と類似している。しかしながら「永遠的客体」が数十億年を単位とする自然現象を考察の対象としているのに対して、この象限は人間や文化に係わる現象を対象としている点において、ホワイトヘッドと異なっている。

7) マルコ・ポーロ『東方見聞録』愛松男訳 平凡社、第1巻 p. 340

8) 同上 p. 351

9) 同上 第2巻 p. 130

10) エドワール・ジョノー『ヨーロッパ中世の哲学』二宮敬訳 クセジュ文庫 p. 80

11) 同上

12) 出典 藤津慈生 年表・海外における日本研究（本報告書資料編）

13) D・キーン『世界の中の日本』（日本国際文化研究センター編『世界の中の日本』1. 1990, p. 331—347）p. 47

- 14) 参考文献 エンゲルベルト・ケンペル、フィリップ・フォン・シーボルト記念論文集 1966  
 独逸東亜細亜研究協会
- 15) 大内兵衛 アダム・スミス『諸国民の富』解説 (岩波文庫 第5版 p. 88)
- 16) 上掲
- 17) V・パルトリド 欧州、特に露西亜に於ける東洋研究史 外務省調査部訳 生活社 昭和14  
 p. 43
- 18) 参考文献 風間喜代三『言語学の誕生』岩波新書 1987
- 19) 前掲 12)
- 20) 日本研究者のモナシュ大学教授 J・V・V・ネウストプニーは、その「日本研究のパラダイム」において、日本研究の歴史的発展を①ジャパノロジー型パラダイム、②日本研究型パラダイム、③現代型パラダイムの3つに区分している。それによれば、ジャパノロジー型パラダイムの特質は、i) 近代社会前期の意識の上に立ち、確立されたばかりの近代社会と世界との関係を位置づけようとする試みの結果であること、前期に生み出されたこと(理論的な枠は東洋学であり、歴史学・文学・言語学等個々の学科には分かれていないこと)、ii) ジャパノロジーの研究対象は、同時代の日本よりも日本の過去(日本の政治史、文化史、文学史、史的言語学等)であること、iii) 「日本」という現象に関して肯定的だが、「異国日本」という日本観に研究の出発点があること、等を挙げている。
- 21) 前掲12)
- 22) 前掲14)
- 23) 上記のネウストプニーによると、「日本研究」とは、それ以前のジャパノロジーと現代型パラダイムとの中間に位置づけられ、第二次世界大戦頃から、一部の日本研究者が「構造的なパラダイム」を作り、1950年代から一般的な傾向になったとされている。(同上 p. 88-89)。同教授は、日本研究型パラダイムの特質として、i) 応用性への傾向(例えば戦時中の米国の日本関係の人類学-ベネディクトー、言語学-ブロック等-の研究)、ii) 社会科学への関心の広がったこと、iii) 現代の社会の研究も他の分野と同等に広がり、語学面では文語より現代の口語が学習の対象となったこと、等を挙げている。しかしながら、本稿の主張によれば、i) については、日本学及び日本研究のいずれもが「応用的」な性格をもつものであった。またii) についても、前述の通り、「日本学」(ジャパノロジー)においても社会科学的関心の研究がなされていた。従ってその判断基準によると、日本学と日本研究との区分が不明確になる。
- 24) 国際交流基金編 外国における日本研究 p. 19
- 25) 基礎的研究(第Ⅲ象限)における個別科学の対象領域も、第二次世界大戦以前と較べて、他の諸個別科学の領域と、より複雑に交差している。例えば1992年のノーベル経済学賞受賞者であるアメリカの学者 G・S・ベッカー(1930-)の経済理論は、通常は経済学者が取り上げない人種、性等の個別的な要因を含む社会的現象について経済学的なアプローチを行っている(参考文献「経済理論」宮沢健一訳 東洋経済新報社 1976)
- 26) Dewey, Decimal Classification ed. 9. 1979, ed. by Benjamin A. Custer, N. Y. Forrest Press.
- 27) 日本学術振興会年報
- 28) 同上
- 29) 参考文献 山内昌之『ラディカルヒストリー』1991 中公新書
- 30) 上掲

- 31) Institut Vostokobedenia Akademii Nauk USSR, Istoria Ochechestvenno Vostokovezhenia do serediny XIX veka. p. 7
- 32) 参考文献 Apatov, V. M. Izuchenie iaponskovo iazika b Rocia i USSR. Moscow Nauk 1988
- 33) 桂川甫周『北槎聞略』(岩波文庫版) p. 183
- 34) 『諸国民の富』第5巻索引
- 35) Stewart, D. Bibliographical Memories of Adam Smith. Leningrad. 1811
- 36) ドナルド・キーンによれば、『万葉集』をドイツ語に訳したドイツの東洋学者 H・Y・クラップフロート(1783—1835)は、シベリアでめぐり合った日本人の漂流漁師達から日本語を学んだとのことである(前掲13) p. 38)。漁師達の名前が明らかではないが、それが事実であるとすれば、日本語の学習に関して当時のヨーロッパ諸国に対するロシアのユニークな地理的環境を示しているといえよう。
- 37) 久米邦武編『米欧回覧実記』(岩波文庫版第4巻)、p. 84
- 38) 同上 p. 106—7
- 39) 参考資料 上掲 30) 及び国立国会図書館所蔵播磨旧蔵書目録
- 40) 上掲31)
- 41) ① Bibliografia iaponi i literatury isdannannoi v Rocia s 1734—1917. Moscow, Nauka, 1963. ②同1917—1958、1961
- 42) 上掲
- 43) 上掲
- 44) 前掲29) p. 18
- 45) 参考資料 ① Komkov, G. D. ed. Akademia Nauk USSR : ratkii istoricheskii ocherk. Moscow, Nauka, 1974, 521p.
- ② 柳富子『ソビエトの日本学』比較文学 22 (1979), p. 49—56 ③加固寛子『ソ連における日本研究』国際交流基金編「ソ連・東欧における日本研究」1986、p. 27—58
- 46) ソ連大百科辞典1976年版
- 47) 前掲41)—②
- 48) 前掲41)
- 49) 同上
- 50) 前掲29) p. 176—210
- 51) 前掲45)—① p. 315
- 52) 前掲32) p. 165
- 53) 同上 p. 104
- 54) R・J・ミラーほか「日本語教師大いに語る」『国際交流』No. 18 (1978), p. 39—56
- 55) 例えば ①岩城成幸「ソ連社会主義と『科学批判』」『レファレンス』38 (2)、1988、2、p. 25—40、②田中英彦「ソビエト・エトノフ科学の挑戦と挫折」『世界』No 555, 1991, 6、p. 130—135、③鶴尾功等「スターリン時代の科学のゆがみ」『前衛』No. 618 1992, 4、p. 218—241
- 56) 上掲② p. 131
- 57) 前掲41)②
- 58) 日本学術振興会年報
- 59) Ezhegodnik knigi 1961—1985

- 60) 同上
- 61) Ezhegodnik knigi USSR, 1997
- 62) 前掲46)
- 63) 前掲31)
- 64) ロシア語の「ストラナベジェーニエ」は「大陸・諸国・広大な地域の複合的な研究を行う地理科学のシステムに属している」前掲46)
- 65) 1961年から1975年まで日本研究書刊行点数（翻訳書を除く）は、236点である。そのうちソ連科学アカデミーが何らかの形で編集・企画等に係わった図書（各図書のタイトルページ上方に記載）は92件であるが、そのうち東洋学研究所は19件である。
- 66) 伊藤孝之 ソ連科学アカデミーの危機—旧ソ連諸国、とくにロシアの学術体制が直面している諸問題—『学術月報』Vol. 45 (1992), No. 9, p. 6—1